ジョン・シー
(John Shih)氏
A&Sグループ 編集担当取締役

混迷社会を抜け出す未来型セキュリティ

GDSF JAPAN 2008の基調講演の一つとして、A&Sグループのジョン・シー編集担当取締役が未来型セキュリティシステムについて講演した。講演内容は、セキュリティと格差社会、IP化の流れ、IP監視に不可欠なインテリジェント化、中国に見るセキュリティビジネスの４項目による構成だった。本稿ではその内容を要約して掲載する。

セキュリティと格差社会

現在、世界的な傾向として格差社会が浸透している。セキュリティにおいてもその影響は大きく、セキュリティにもそれに対応して二極化している。一つは国家事業や公的事業などでの高い水準のセキュリティで、この需要は普遍的で統合化がカギとなる。もう一つは商業施設や小売店舗などの一般水準のセキュリティで、これは価値がカギとなる。

IP化の流れ

システムという観点からは、セキュリティの流れが顕著にIT化およびIP化に移行している。これは、システムを統合化および高水準システムの実現には不可欠である。さらに、犯罪対策を事前に整えることができ、それに付随してサービスの向上を図ることができる。

具体的には、監視や入退管理、侵入警報や建造物の自動管理、そしてITシステムを統合化し、これらをIP化することが最善の解決策として提案および導入されている。

IP監視に不可欠なインテリジェント化

このようにIP化した監視システムを実現する上で不可欠となるのが、インテリジェント化すなわち高度分析機能を付加することである。高い水準のセキュリティでの例として挙げたのが、重要な社会基盤整備である発電所や重要施設、港湾や海岸線や沿岸などでのセキュリティ導入だった。また、一般水準ではカジノでの導入例を示した。

さらに、IP監視の中核技術である映像分析の重要な点すなわち、簡単なソリューションであり、容易にインストールすることができ、業務の分析が的確で、円滑に情報を入することができ、費用対効果が優れていることなどを解説した。

中国に見るセキュリティビジネス

上記で解説した具体例として中国の事例を紹介した。中国の主要都市では大量のカメラを導入している。例えば、北京や上海だけでなく広州や深圳などでも既に20万台ものカメラを設置し、各省では100万台ものカメラを設置している。

一方、IP監視サービスへの移行も活発化している。しかもこれまでセキュリティ市場と無縁だった大手システム構築企業が参入している。日本のNTTに相当するHBCがその典型的な例である。しかも、これまでよりも大幅に高い水準のサービスを提供している。来訪者管理システムにその事例を見ることができる。入退管理にRFID技術を融合し、自動車のナンバープレート認識や生体認証を組み合わせて、これまで実現することのできなかったセキュリティシステムを構築している。そして、このような動きにより、セキュリティシステムにおいて技術が再び主役の座についている。

このように、セキュリティビジネスでは様々な革新が実用化されている。その背景にあるのは、閉鎖型から開放型への移行、個別対応化と標準化の共存、異業種分野との協力と競合の一体化であると指摘して講演を締めくくった。